

Q63

慢性硬膜下血腫は、どのくらい経って症状が出てくるのですか？



慢性硬膜下血腫は、60歳以上の高齢者に多く、頭部外傷後1～6カ月経って見当識障害、尿失禁、歩行障害、手足の麻痺などの神経症状で発症します。



エビデンスレベルⅠ

回答者

中口 博

1 慢性硬膜下血腫とは？ (図1)

- 慢性硬膜下血腫は、比較的高齢（60歳以上）の軽微な頭部外傷後に生じることが多い外傷性疾患です。
- 高齢者の萎縮脳では、軽い外傷でも頭蓋骨の中で脳が動き、脳表面のくも膜が引っ張られて裂けやすくなります。脳表のくも膜が裂けて、脳脊髄液が表面にたまった状態のことを「硬膜下水腫」といっています。この状態では普通は無症状ですが、本来は流れていないところに脳脊髄液が存在するため、生体の免疫機構が働き、脳脊髄液の表面に膜をつくります。この、脳脊髄液の表面を覆う膜（血腫被膜といいます）に毛細血管が発達し、ジワジワと出血してきます。こうしてできた血腫が脳を圧迫すると、神経症状が出てきます。若年者の頭部外傷後にもみられることがありますが、まれです。若い人の慢性硬膜下血腫は、頭蓋内圧亢進症状（ひどい頭痛、嘔吐）で発症します。

2 受傷後どのくらいで発症するの？

- 髄液が硬膜下腔にたまって血腫被膜が生じて、それから

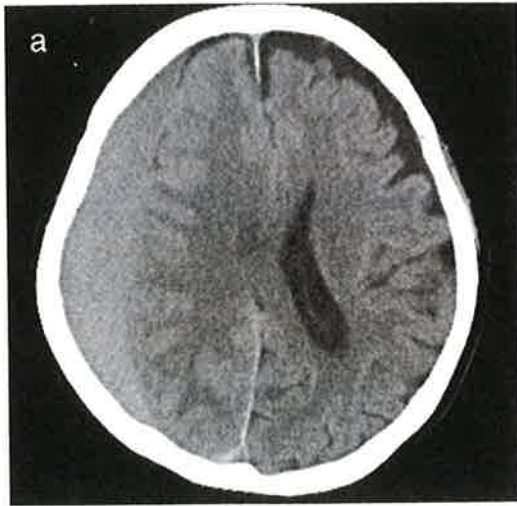
出血するため、外傷後2～3週間では、硬膜下水腫ができることはあっても、症状が出るような厚い慢性硬膜下血腫ができることはありません。

- 慢性硬膜下血腫による症状が出るのは、早くても頭部外傷後3週間以降です（頭部外傷の慢性期）。半年以上経ってから症状が出ることもあります。一般的には慢性硬膜下血腫による症状が出るのは頭部外傷後、早くも3週間、遅くとも半年以内と考えてよいでしょう。
- 半年以上経つと、(仮に手術をしなくても)徐々に慢性硬膜下血腫は縮小し、1年以内に自然に治ることが多いとされます。ただし神経症状が出たのに手術をしなければ、仮に1年後には治癒していたとしても後遺症が残りますので、頭部CTの所見で慢性硬膜下血腫により明らかに脳がつぶされていて、それに伴う神経症状がみられる場合は手術を行います（たとえ高齢であっても、もともと元気で慢性硬膜下血腫により症状が出たことが明らかな場合は、簡単な手術で治すことができるため、手術を受けることをお勧めします）。

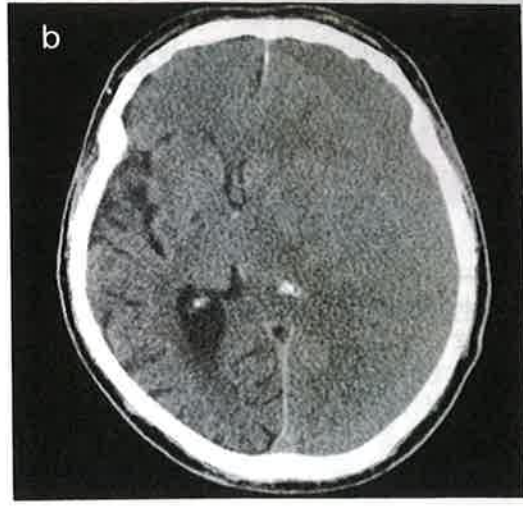
ワンポイントアドバイス



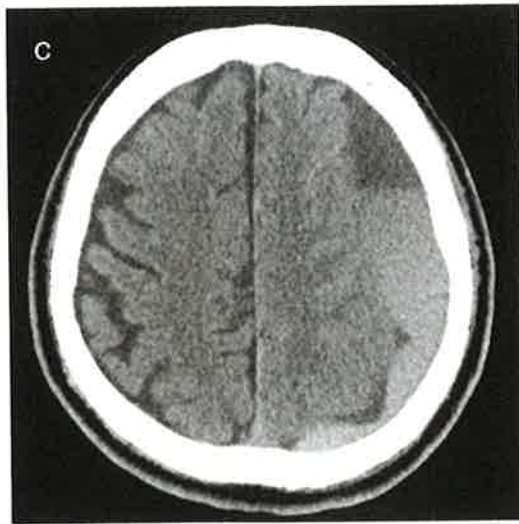
高齢者で、頭部外傷後1ヵ月以上経って認知症や片麻痺などの症状が出てきた場合は、慢性硬膜下血腫を疑いましょう。慢性硬膜下血腫による神経症状であれば、手術後、非常によく改善します。



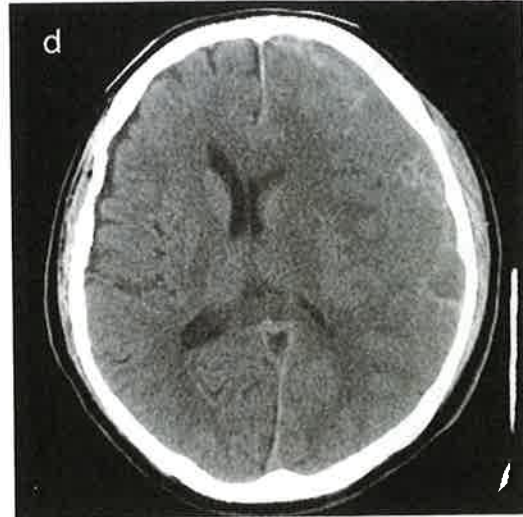
a: 慢性硬膜下血腫第1期 (均質型)



b: 慢性硬膜下血腫第2期 (内膜肥厚型)



c: 慢性硬膜下血腫第3期 (層形成型)



d: 慢性硬膜下血腫第4期 (隔壁形成型)

図1 慢性硬膜下血腫の頭部 CT 所見の4つのバリエーション

慢性硬膜下血腫は経過中頭部 CT での見え方が変化していく。最初は血腫は均一な灰色に見える (a: 均質型)。その後内膜が白く目立つようになり (b: 内膜肥厚型)、次いで上澄みと沈殿した血腫が分離した状態になり (c: 層形成型)、末期には骨と内膜の間に多数の線維性の梁が目立つようになり (d: 隔壁形成型)、縮小していく。このような経過を知っておくと、患者さんの慢性硬膜下血腫が治りやすいのか、治りにくいのかを推定することができる。

参考文献

- 1) Nakaguchi H, Tanishima T et al: Factors in the natural history of chronic subdural hematomas that influence their postoperative recurrence. J Neurosurg 95 : 256-262, 2001
- 2) 中口 博, 吉益倫夫 他: 慢性硬膜下血腫病期分類と血腫被膜の造影性の相関. 脳神経外科32 (2) : 157-164, 2003
- 3) 中口 博, 寺岡 暉 他: 慢性硬膜下血腫における血腫性状分類と血腫凝固能・血腫血球成分との相関. 脳神経外科31 (6) : 639-646, 2003